

試論 賢治の描いた夫婦

——子供のいない「十六日」の場合——

はじめに

宮沢賢治に、一組の夫婦の姿を扱った「十六日」という作品がある。「短編梗概」等六篇のうちの一つとされる「十六日」に関する研究は、昭和五〇年代以降あまり進んでいない。昭和二〇年から四〇年辺りに雑誌「四次元」で繰り返し広げられた論(注1)(短篇小説あるいは詩への可能性の有無、夫婦の描写に対する賛否等)を軸に、「十六日」の成立期を明らかにしようとする昭和五四年の山本早苗(注2)の論や、最近のものだと「泉ある家」との類似性に触れながら二篇のモチーフとなった具体的な場所を地質学の観点から確定しようとする原子内貢(注3)の論が目につく程である。

作品の解釈に関してはいずれも似通っており、昭和五四

田 嶋 彩 香

年の山本論がひとつのまとまりを示したと言っている。夫婦の問題を真正面から扱った、賢治作品としては稀有な存在であるにも関わらず、その点に迫った論もないように思う。本論文では、「十六日」に描かれた夫婦像を通して、新しい読みの可能性を探って行きたい。

一、夫婦二人きりの休日を横断する学生

鉱山の仕事も休みで、畑の仕事も一段落ついた「盆の十六日」、「一年に二日しかない恐らくは太陽からも許されさうな休」日。甲斐甲斐しく丹精込めた盆休みの食事の支度を整える妻おみちと、「十一時近く」まで眠る夫嘉吉。「ひる近いからと起こされた」嘉吉が身なりを整え食卓に座し

た所で、ようやくおみちも一息つき、夫婦の本当の休日が始まろうとしていた。おみちの拵えたお餅をつつきながら、晩に出掛けるところの相談などをし、ほんのり上気して楽しんでみると、「表の河岸でカーンカーンと岩を叩く音が」聞こえてきた。

二人はぎよつとして聞き耳をたてた。／音はなくなつた。(今頃探針など来る筈でないな) 嘉吉は豆の餅を口に入れた。音がこちこちまた起つた。／(この餅拵えるのは仙台領ばかりだもな) 嘉吉はもうそつちを考へるのをやめて話しかけた。(はあ、) おみちはけれど、も気の無ささうに返事してまだおもての音を気にしてゐた。／(今日はちよつとお訪ねいたしますが) 門口で若い水々しい声が云つた。

嘉吉は、途切れた夫婦の時間を繋ぎ直そうと餅に話題を持って行くが、おみちは「岩を叩く音」になお気を取られていた。すると、ほどなくして「門口」から「若い水々しい声」が響いた。物語はここから大きく動き始める。

嘉吉は次第に穏やかさを失い「用があつたらこつちへ廻れといった風」に「はあい」と返事をする。聴覚を声の主に傾けながらも、視覚は「じつとおみち」を捉え、意識も

おみちに集約させていた。声の正体が明らかになると、「お前さんどこから来なすつた」と「少しむかっぱらをたてたやうに」[〃]小さな怒り[〃]を芽生えさせる。これがもし老いた弱弱い声で、声の主もそれらしい老人だつたとしたら、嘉吉はこの先あんなにも感情を荒立てることはなかつたろうし、おみちに絡みつくこともなかつただろう。

つまり「若い水々しい」声の主が、声の通りの若さを持つ学生だつたことが、嘉吉にとっては都合の悪いことだつた。加えて、仙台の大学から地質学調査にやつてきたという「かばん」を持つ学生の姿は、さらに嘉吉の癩に障つたのである。無論「岩を叩く音」がおみちの心をそらした様子を見ている嘉吉からすれば、貴重な夫婦水入らずの時間を邪魔された訳だから、訪問者の訪れはとにかく迷惑なものであつたことは言うまでもない。

若さや身なりや身分、そして口調に至るまで、学生が具えているものはすべて、嘉吉の持つ世界とは対照的な位置にあるものだつた。これらが、その後の嘉吉の心中をかき乱し苛立たせる誘因になるのだが、この時点では、嫉妬心や対抗心から「むかっぱらをたてた」と解釈するよりも、見慣れない人間に対する警戒心や気後れを払おうとして、虚勢を張り「むかっぱらをたてたやうに」やや強気な口調に出たと言う辺りが相応しいだろう。

東京対地方の対比は、ここでは仙台と嘉吉たちの住む山村とに対応する。山村の狭いコミュニティの中で生きる彼らにとって、訪問者はたいてい顔見知りの人間で、外界から個人宅へやってくることは珍しく、都会の人間、まして知識人などそうあることではないだろう。多少の動揺が生じるのも無理はない。ただし、嘉吉が働く鉾山に限ってはどうかだったのか、若干の検証が別途必要であろう。

(仙台的大学のものですがね。地図にはこの家がなく水車があるんです。)(ははあ) 嘉吉は馬鹿にしたやうに云った。青年はすっかり照れてしまった。/(まあ地図をお見せなさい。お掛けなさい。) 嘉吉は自分も前小林区に居たので地図は明るかった。学生は地図を渡しながら云はれた通りしきりに腰掛けてしまった。

嘉吉は、学生の質問が自分の知る領域のものだと分かると、受け応えに余裕を見せるようになる。自分の優位を誇示するかのごとく、学生を「馬鹿にしたやう」に「ははあ」と言い、「まあ地図をお見せなさい。お掛けなさい」と共通語で話し始める。嘉吉は、言葉通り学生が「しきみに腰」を掛けたことが、自分の言いなりになっているようで気分が良かった。調子が良くなった嘉吉は、流暢に共通語を並

べ学生の質問に対応する。

学生が「水車」だと思っていたものは、実は水車ではなく「掛手金山の精錬所」の金鉾を搗くものであった。嘉吉は得意気にそのことを学生に伝え、「水車って云へば水車でさあ。たゞ「粟」や稗を搗くんでない金を搗くだけで」と、やんわりと補つても見せる。学生の言う「水車」の所在について、原子内は「土地の古老」の話をもとに「明治末期？」に「現在の重王堂橋上流に水車があったが、事故のために取り壊した」「賢治の時代にその残骸でもあったろうか」と言及している。

しかし、嘉吉は通常の「水車」であることを否定し「掛手金山の精錬所」の「金を搗く」ものだと記号が示す実体を説明している。学生は地図上の記号をただの「水車」と思い込んでいたのである。舞台のモチーフとなった江刺にも、金山がいくつかあったという記録が残っているので、実際その周辺に「金を搗く」ものがあつたのかもしれないし、賢治が持っていた地図にそのような記号があつたのかもしれないが、断言はできない。もし、賢治の発想が江刺で見た「水車」から生み出されたものだとしたら、栗木鉾山で使われていた水車もモチーフの一つかもしれない、ということのみ付け加えておく。

地図上の「水車」らしきものの正体が明らかになり、そ

の後で嘉吉夫婦の家が建ったことがわかると、学生は丁寧な御礼を述べ去ろうとするが、気を良くした嘉吉は、「あわて、」それを引き留める。こちらの暮らしぶりを覗き見するわけでもなく、ぶっさら棒な対応や「馬鹿にしたやう」な態度に対しても、「すこしもこつちを悪く受けない」学生の態度に嘉吉は好感を抱いた。が、学生相手に「おみちの前でもう少してきばき話つゝけたかった」嘉吉は、自分を学生と対等以上のものとして振舞いたかったわけである。

嘉吉は、おみちが学生のために拵えた膳を食すよう、この家の主人の立場から学生に促す。それに続けるように「おみちも低く」おあがんなんえ」と言う。やや渋りながらも、学生が再度「腰をおろし」膳に手を付け始めると、嘉吉はさらに饒舌になった。学生が、忙しなく「餅をげろ呑み」するようにも見える食べ方しても、嘉吉の上機嫌に変わりはなかった。上機嫌は学生が去ったあとも暫くは続いた。しかし、おみちの「娘のやう □ な顔いろ」の出現とともに、夫婦の貴重な休日は、波乱含みの展開となっていく。

二、おみちの「一過性の恋」の有無と、嘉吉の感情の乱れ

学生が去った後、再び夫婦の貴重な休日の中で「ゆっくりくつろ」ぎ始める嘉吉。一方おみちは、「娘のやう □ な顔いろでまだぼんやりしたやうに座つてゐた」。その姿は、おみちの意識が自分の元にはないように嘉吉には見えた。そして、その「顔いろ」が「おみちを知つてからわづかに二度だけ見た表情」であると思ひ当つた嘉吉は、まるで自分に言い聞かせるようにつぶやく。

(おらにもああいふ若いづぎあつたんだがな、ああいふ面白い目見る暇ないがったもな。)

嘉吉の言葉を聞いているのかいないのか、おみちは「まだぼんやりして何か考へてゐる様子で「あん」と一言だけ返す。その様子を視覚と聴覚で捉えてしまった嘉吉は、それまでの穏やかさを急激な早さで怒りへと塗り替える。「ぢやい、はきはきと返事せぢや。何であ、あたな人形こさ奴さあすくにほれやがて、突然怒りを露わにした嘉吉の声におみちは驚く。皮肉にも、ここでようやくおみちの意識が夫婦の時間軸の中に連れ戻されたわけだが、嘉吉の怒りの理由が不当だと思つたおみちは、顔を「さあつと青

じろく」して、「何云ふべこの人あ」と言い返す。しかし、おみちの「青じろ」い表情が再び赤みを帯び始めるのに合わせて、嘉吉の怒りが爆発してしまふ。

（え、糞そのつら付。見だぐない。どこさでもけづがれ。びつき。）嘉吉はまるで落ちはじめたなだれのやうに□「膳」を向ふへけ飛ばした。おみちはたうたうつぶせになつて声をあげて泣き出した。／＼（何だい。あつたな雨降れば無ぐなるやうな奴風こさ、食えの申し訳げないの機嫌取りやがて。）嘉吉はまたさう云つたけれどもすこしもそれに逆ふでもなくたゞ辛さうにしくしく泣いてゐるおみちのよごれた小倉の黒いえりや顫ふせなかを見てゐると二人とも何年ぶりのかたゞの□子供になつてこの一日をまゝ、ごとのやうにして遊んでゐたのをめちやめちやにこわしてしまつたやうでからだが風と青い寒天でごちやごちやにされたやうな情ない気がした。

嘉吉の感情の乱れを嫉妬と捉え「十六日」を考察する先行研究がある。続橋は「作者の主題は、嘉吉の嫉妬心に集中されているようだ」とし、小沢は「嫉妬される立場の方向に賢治がある」と、学生と賢治を重ね合わせた解釈を示し、

伊藤は「通りすがりの町の学生の闖入から心理的な異和が生じ、嫉妬となつて爆発、しかし、妻を「可哀さうに」思う一念で」夫婦関係が「回復」という「素朴な山家の住人の心情世界に惹き起こされた波紋を描いた作品」としている。

また、おみちの表情に関して山本は「一過性の恋があるとするなら、このおみちの「顔いろ」も「ぼんやり」もそのせいにちがいない」「嘉吉にどなられて「さあつと青じろくなつてまた赤くなつた。」のは一瞬夫のことばに、自分の動揺を自覚したためなのだ。嘉吉の理不尽な言葉のせいばかりではない」とし、続橋は「嘉吉の嫉妬」は「おみちの急所を突いたかもしれぬ」としている。

おみちの「娘のやう□な顔いろ」を、学生に惚れた表情と捉えたのは嘉吉である。その表情が「おみちを知つてからわづかに二度だけ見た表情」だったことも、ある種の妄想に拍車をかけたのだから、それはあくまでも嘉吉の目にそう映つただけなのではなからうか。

確かに、おみちの表情の変化から、「一過性の恋」や「急所を突」かれたという風に読み取ることも可能だが、この表情の変化はおみちが意識していないことを夫から言われたために起こつた現象であらう。「ぼんやり」していたのも、珍しいものを見た（体験した）後に起こる状態、緊張が解

けた後の余韻に浸っている状態に近いように思う。つまり、「青じろ」い表情を再び赤らめる変化は、嘉吉がおみちの意識とは無関係に、おみちの姿から、女の部分を感じ取っていたことを知ったためではなからうか。はじめはその不当さに「青じろ」い表情を浮かべるが、すぐさま、そういう目で自分が見られていた事に気付き、恥じらいから赤らめたのではなからうか。

繰返しになるが、嘉吉はおみちの「娘のやう」な顔いろを見た時、かつてあの学生のように自分にも若い時があったことを話す。しかし、何を考えているのか一言「あんな」としか返さないおみちの姿が引き金となつて感情を乱し始める。無論、嘉吉のこの言い訳は、嘉吉が若い頃学生と同じ環境下で「面白い目見る」ことを望んでいてそれが叶わなかった、という自分の経歴に対する悔いが潜んでいるわけではないが、これ以降嘉吉は、学生の〈若さ〉を否定的意味で持ち出すことになる。

「あたたな人形こそ奴さあすくにほれやがて」何だい。あつたな雨降れば無くなるやうな奴風こさ、食えの申し訳げないの機嫌取りやがて」「あんなひよろひよろした若造にくらべては何と云つてもおみちにはおれの方が勝ち目がある」——学生には紙の上の知識は豊富にあるだろうが、嘉吉が歩んできた人生（経験値）に比べれば、まだまだ世間

を知らない青二才であり、自分が体得した生きた経験も学生にはない。〈若さ〉について触れる嘉吉の言葉の裏側には、こういう思いが潜んでいたように思う。

これは優劣の問題ではなく、生きてきた環境が異なり、環境が違うが故に体得したのも異なる、ただそれだけのことである。しかし、階級差や階層が目に見えない微妙な心理にも影を落としている。おみちが環境の違いによって生じた隔たりに魅力を感じ「娘のやう」な顔いろを浮かべたのだとしたら、そんな風に思うと、嘉吉はどうにもこうにもやり切れない思いに苛まれ、一時的に自分の価値や自信を見失い、感情を乱してしまつたのだろう。「嫉妬の中には、愛よりも自愛のほうが多くひそんでいる」と言つたのは、ラ・ロシユフコーである。嘉吉の感情の乱れも、おみちが学生に奪われるかもしれないという不安よりも、自尊心が脅かされたために生じたようにも思える。

第一章でも少し触れたが、学生が夫婦の元を訪れた際の描写は、「門口で若い水々しい声が云つた」「若いかばんを持って鉄槌をさげた学生だつた」となっている。後者の引用の「若い」は手入れによつて付け加えられたものである。〈若さ〉を何の陰りもなく他人の前にさらすことができること自体、すでにひとつの特権であるかもしれない。だとすれば、嘉吉が「少しむかつぱらをたてた」ことは、学生

の〈若さ〉にも作者賢治の敏感な目配りが込められていたゆえだと言っても良いのではなからうか。

嘉吉は「鋳夫どもにさへ馬鹿にはされない肩や腕の力」の持ち主で、以前いた「小林区」では「現場監督」を務め、今では「鋳山の杭木の係りではもう頭株」として働いている。しかし、嘉吉にはそれに相応する自信がやや欠落しているように見える。おそらくは、この土地に根を下ろし、住民としての安定を得て、今後さらにヤマ社会で出世していくであろう嘉吉の微妙な心の揺れを、結婚三年目のまだ親になっていない夫婦間に起きた喧嘩（心の行き違い）によってあぶりだしている。これもまた作品の魅力の一つであろう。

三、「敷島」と「煙草」の使い分け

学生は、歓待を受けた御礼として、「敷島」と「キャラメル」を一つずつ残していった。気になるのは、「敷島」という語である。「敷島」は言うまでもなくタバコの銘柄のことだが、嘉吉とタバコの関わり場面では次のように描かれている。

「煙草・たばこ」

A. 嘉吉は朝いつもの時刻に眼をさましてから寝そべったまゝ、煙草を二三服ふかしてまたすうすう眠ってしまった。

B. なあんだ。あと焼石まで煙草売るところもないも。

C. 嘉吉はマッチをすつてたばこを二つ三つのだ。

※傍線筆者／B. 嘉吉の言葉

「煙草」という語が登場するのは、この三箇所である。いずれも【煙草】あるいは【たばこ】という字があてられ、具体的な銘柄までは出ていない。嘉吉が吸っているタバコの銘柄が記されていないこと、その点にだけ注目すれば、不自然な所はないように思う。だが、ここで注目したいのは、タバコに対する字の使い分けである。

学生が御礼としてタバコを置いていく場面では、「学生は鞆から敷島を一つとキャラメルの小さな箱を出して置いた」という風に描かれている。結尾にも学生の置いていったタバコは「キャラメルの箱と敷島は秋らしい日光のなかにしづかに横はった」とある。学生が持ってきたものに対しては、「敷島」を使うことが徹底されているように思える。それに対し、嘉吉やおみちに関わるタバコの表現を見ると、銘柄は示されず「煙草」あるいは「たばこ」という普通名

詞が使われるのみに止まっている。

この作品には、終始「格差」という大きなテーマが底流に潜められている。そこに目を止めれば、「都会と田舎」「貧と富」「学生と鉦夫」「若いと古い」「きれいと醜い」という幾つもの対立が流れていることがわかる。特に「都会と田舎」は、賢治の作品でもたびたび扱われている問題であり、はつきりと登場人物や語りによって語られないという意味で顕在化しないものの、「十六日」でも大きなテーマとなっている。この「煙草」と「敷島」の使い分けも、これらのテーマを表現するための小道具の一つであろう。

「敷島」と言えば、煙草の銘柄の中でトップクラスのものである。『吾輩は猫である』の寒月が愛用している銘柄の一つも「敷島」であり、漱石は他にも『坊ちゃん』『門』『虞美人草』など多くの作品の中に「敷島」を登場させている。また、漱石自身も「敷島」を愛用していたことを「文士の生活」の中で触れている。他にも芥川龍之介や倉田百三など多くの文学者からも作品に採用したり、自身が愛用していた銘柄である。

作品のモチーフである江刺の地に賢治が初めて足を運んだのは大正六年、作品が書かれたであろう時期は昭和五年以降^(注12)、この辺りの値段表を見ても一番高価な銘柄であることがわかる。具体的な数字をあげると、大正六年は十二

銭、昭和五〜七年は十八銭である。値段がはるだけのこと
はあって、そのパッケージのデザインにも拘りが込められていたようだ。^(注13)

多くの知識人らに親しまれた「敷島」は、文化的なステータスをも表現するものとして等、さまざまな場面でブルジョア層の小道具として作品上でも実生活上でも用いられることがあった。改めて「十六日」における「敷島」の意義を考えてみると、大学生という社会的に恵まれた階層の人間が、「敷島」を持つていること、それを御礼として置いていくことは、彼らの側にとっては、大した違和を感じることにはないだろうし、一寸した御礼のために持ち歩いていたと捉えることもできる。もちろん、「十六日」での「敷島」の役割は、高級品としての価値や権力を強く帯びたものではない。

地図に関する質問をした上に、餅を^(注14)馳走になってしまった事もあって、学生は「敷島」と「キャラメル」を置いていくわけだが、この行為は学生からすれば当然のことであり何ら悪気のない振舞いであつただろう。しかし、高級品に縁のない人間からすれば、必ずしも面白いものではない場合もある。とは言え、嘉吉もおみちも御礼の品を目にした時、そういう感情を表に出してはいない。礼儀として一旦受け取りを遠慮するという姿勢を見せた以降、手に

触れることもないし続けての言及も作中にはない（作品結尾での描写を除いて）。

学生が嘉吉夫婦と触れ合う時間はそれほど長くはない。早々に夫婦の元を去っていく。彼は、夫婦の幸せな時間の中に居合わせそれを楽しむわけでもなく、夫婦の喧嘩に巻き込まれるわけでもなく、その仲裁をするわけでも傍観者としてその場に居合わせるわけでもない。夫婦の平穏な時間も、夫婦の喧嘩の時間も、夫婦の幸福な時間も、すべて学生が去った後（そして来る前）にやってきたもの（あったもの）である。つまり、学生は夫婦の問題を目の当りにしていないのである。

学生の側から見れば、学生は何一つ夫婦の問題に手を触れていないし、それどころか、貴重な休日を通ぐす夫婦の様子を察して早々に家を去ろうと努めている。学生が夫婦喧嘩の原因になったとはいえ、その場に居合わせなかつたおかげで、夫婦喧嘩は一時的なさざりとしたものになり、夫婦の貴重な休日も、第三者を交えない夫婦だけの時間としての価値を早い段階で取り戻すことができていた。加えて、学生という訪問者がマンネリ化しつつある夫婦生活（結婚して三年、そして子供もいない暮らし）をさらりと通過したことが刺激となり、結果的には夫婦関係を良好にし「二人とも何年ぶりかまたゞの□子供になつて」真の休日を

楽しむことができるようになったのかもしれないのである。

賢治は、社会的に恵まれた階層の人間として生きた自分の一部を、学生という存在に投影し「十六日」を書き上げたのだらう。それはつまり、学生が意図せず、自分の手を下さず、自分の知り得ない場所、何かが起こっているかもしれない、という繊細な（ある面では、過敏な）想像力を持った賢治の表現方法の一つだと言えないだらうか。身分や家柄、知識や身のこなしなど、裕福な生活環境の中で育まれた存在そのものが、他の人を苦しめ傷つける場合があることを賢治は十分理解していた。

作者宮沢賢治は、自分が加害者の位置に押し上げられるような思いで「坎珂な」「村人たち」「山の部落の人たち」を見つめた。その折おのれの位置の自覚から生ずる深い罪障感が「山火」という作品の底流を形作つた。そして、「坎珂な」被害者の立場に立たされた者たちから受けるかもしれない指弾や憎しみに対する恐れゆえに、彼らの現実の姿に耐えずして理想の夢へと目をそらすことさえあった。けれども、その後の生涯の苦しい営みの末に、最晩年に近く、定稿として整理を果たす際には、ついに現実を現実としてたじろぐこ

となく厳しく受けとめて示す境位にたどりついたのであった。「四六 山火」定稿という作品の高みはそこから得られたと言うべきであろう。

（栗原敦「加害」の影を——「山火」再読^{（註）}）

右記の引用は、賢治の詩「山火」に関する栗原敦の論考である。「山火」（定稿）は、「一九二四、四、六」の日付が付されている。一九二四年という、「十六日」の舞台のモチーフとなった人首が題名にそのまま採用された詩「人首」の時期と同年である。また作品に登場する人々は、嘉吉やおみちたちと同じように「山」＝田舎に生きる人々であることから、少し話題は離れるようだが遠からず縁を感じたため取り上げた。栗原の指摘する最晩年の賢治の身構えは、そのまま「十六日」を書き上げた賢治の身構えに重ね合わせても、ほとんどずれが生じないように感じる。

自分の側にあつた時は善意だったものが、受け取る側の手に渡った瞬間、悪意に変換されてしまうことは、農に生きる人として生きることを必死に目指した賢治の中に、たびたび刻み込まれた苦い記憶だったのではなかるうか。しかし「十六日」からは、賢治の後ろ向きな自省を強く感じることはない。「現実を現実としてたじろぐことなく厳しく受けとめ」た結果、貧困にあえぐ人々の「現実の姿に耐

えずして理想の夢へと目をそら」して自分と、他者のためと銘打っておきながらも、結果としては自分の満足を満たすために「理想の夢へ」と盲目に走り続けてきた自分の過ちを、以前のように真正面からわざとらしく感情的に表現するのではなく、可能な限り控えめに、「語り手が作品の中で目立つことのないように」、賢治は「十六日」を書き上げたのだろう。

結尾の「キャラメルの箱と敷島は秋らしい日光のなかにしづかに横はった」の「敷島」は、はじめ「たばこ」と書かれていたが、手入れによって「敷島」と改められた。こたわって使い分けられたように思える「敷島」と「煙草」（「たばこ」）も、「キャラメル」も、格差を表現する小道具でありながら、その意図を作品の中ではさり気なく、あたかも映画のエンディングシーンの景物として象徴的に映し出されているかのようである。

四、なぜ、「まだ子供がなく三年経った」夫婦なのか

賢治の作品に登場する夫婦は、たいてい、子供のある夫婦である。そして彼らは、夫や妻である前に父親として母親としての役割を担っている。もちろん、子供のない夫婦を描いた作品も存在するが、「十六日」のような仕

上がりではない。

例えば、「ちやうど一年いっしょに暮し」た夫婦を描いた詩、「二〇七一 わたくしどもは」がそれにあたる。夫である「わたくし」は、「夏のある朝」「町はづれの橋で」出会った「村の娘」から、「美しい」「花」を「二十銭」分買って妻に贈った。花を受け取った妻は、それを「金魚の壺にさし」「店へ並べ」た。夫が「夕方婦」宅すると、妻は「ふしぎな笑」みを浮かべており、ふと食卓に目を移すと「いろいろな菓物」や「白い洋皿などまで並べてあ」った。その理由をたずねる夫に妻は一言、「あの花が今日ひるの間にちやうど二円に売れた」と答える。「その冬」「妻は何の苦しみといふのでもなく」「萎れるやうに崩れるやうに一日病んで没くな」った、という何とも言えない後味を残す詩である。

夫（男）の情緒的な愛の表現方法とは裏腹に、妻（女）は現実的に物事を眺め、愛の表現方法も実生活に則っているという意も込められているだろうか。どことなく、オー・ヘンリーの『賢者の贈り物』を思わせる作品だが、詩というジャンルのせいもあってか、この詩から浮かび上がる夫婦は、『賢者の贈り物』や「十六日」の現実には生きている血の通った夫婦ではないように思う。特に妻の姿はどこかこの世のものとは思えぬ雰囲気を漂わせ聖なるモノ（根源的な女性

像、あるいは聖母像）を感じてしまう。

賢治は、嘉吉おみち夫婦に子供を与えなかった。そして、結婚して「三年」という年月と、「まだ子供がな」い、という設定を与えている。そういう夫婦のもとに、あえて学生という刺激を投入したことは、作者である賢治自身が、夫婦生活や夫婦（男女）間の揺れを楽しんでいるようにも思える。

作品中、自分たちの儲けた子としての意を持つ【子供】が登場するのは、「さうしてまだ子供がなく三年経った」この一文だけである。それ以降は「嘉吉は子供のやうに箸をとりはじめた」「おみち何であその年して、わらすみだいに」「おみちは子供のやうにうなづいた」と、「子供のやうに」「わらすみだいに」という、幼いもの、純粹なもの例えとしての【子供】が登場するのみである。

手入れ前、学生が訪問する以前におみちの拵えた餅を囲む場面では、二人とも箸を取る姿が描かれていた。しかし、手入れ後「そして二人は」と「箸を」は削除され、箸を取るののは嘉吉に限定された。賢治は、おみちが箸を取る（手入れ前も後も、学生が訪問する前おみちは餅に手を付けていないが）代わりに、嘉吉に「子供のやうに」振る舞う事を新たに与えた。考えれば、おみちに対する一方的な怒りも、まるでだっ子のような感じがする。嘉吉自身も怒り

を落ち着かせ冷静さを取り戻した後、「こつちの邪推かも
しれない」と反省しているが、この「子供のやう」な振る
舞いは、彼が父親という責任を背負っていないからこそで
きることである。もし子供がいたら、だだっ子のような振
る舞いは難しいだろう。もちろん、おみちに対しても同様
の事が言えるが、嘉吉と比べると、おみちの子供具合は大
人しいものであった。

嘉吉は、自分の感情を爆発させた後、「逆ふでもなくたゞ
辛さうにしくしく泣いてゐるおみちのよごれた小倉の黒い
えりや顫ふせなかを見た時、なんだか「情けない気がして」
たまらなくなり、「おみち何であその年して、わらすみ
だいに。起ぎろつたら。起ぎで片付けろつたら」と声をか
ける。言葉こそ優しいものの、「じぶんはまだろくに食べ
もしなかつた〔膳〕を片付け」るよう命じる嘉吉に、おみ
ちはやはり、「逆ふ」わけでもなく受け止め片づけ始める。
おみちの振る舞いに関して、統橋は「結局、気持のやさ
しい従順な女性であつた。夫に従う貞淑さが彼女の幸福で
ある。〔家長制度〕の秩序に慣らされ、それが体内にしみ
こんでいる」と述べている。家庭の中に荒波を立てぬよう、
たとえ不服だとしても決して反抗せず、夫に唯々諾々とし
て従う妻であることが、結果として自分の生きやすさにも
繋がる、そのような意識が少なからずおみちの中にもあつ

たのだろう。しかし一方で、賢治は「十六日」の中に、「家
長制度」の秩序に慣らされ「た女性が漂わせる微妙な空気
を描くことを目当てにしていないようにも思う。

嘉吉の側から見れば、泣きじゃくるおみちの姿はまるで
「わらす」のように見えたのだろうが、それは嘉吉の都合
に合わせた見方である。確かに、泣くという行為はある面
で子供のような姿であるが、先に触れた通り、泣きながら
も嘉吉の散らかした「膳」を片付け「る妻としての役目
をきちんと果たしている。そういう意味で、おみちはこの
時点でまだ完全に子供のような振る舞いは出来ていないだ
ろう。おみちがはつきり子供のような振る舞いができるよ
うになるのは、作品の終わり頃である。

（おみち、ちよつとこさ來）嘉吉が云つた。／おみ
ちはだまつて来て首を垂れて座つた。／（うなまるで
冗談づごと判らないで面白くないもな。盆の十六日あ
遊ばないばつまらない。おれ云つたなみんなうそさ。
な。それでもああいふきれいな男うなだて好きだべ）
（好かない。）おみちが甘えるやうに云つた。（好きたつ
て云つたらおれごしゃぐど思ふが。そのこらいなごと
云つてごしゃぐやうな水臭いおらだないな。誰だつて
きれいな□ものすぎさな。おれだつて伊手ででもい、

あねこ見ればその話だてするさ。あのあんこだて好きだべ。好きだて云へ。かう云ふごとほんと云ふこそ実あるづもんだ。な。好きだべ。おみちは子供のやうになづいた。

夫婦のみずみずしさやあどけなさを描くために子供がない設定を、あえて投入したことも、賢治の目論見の一つではなからうか。賢治は子供を置かない代わりに、彼らに「子供のよう過ぎず時間」を与え、子供のよう振る舞うことを許した。一般論で考えれば、大人になつてから心底から童心に返ることは中々難しい事であり、新婚ならまだしも結婚してから三年経つ夫婦であれば尚更である。結婚して三年が経っているというのに、嘉吉夫婦から真新しい夫婦のような空気を感ずるのは、やはり彼らに子供がないことも理由の一つであろう。

家族的係累がほとんど影を見せていない嘉吉夫婦の、「ままごとのやうな」子どもっぽい甘えあい。ここには、三年を経た夫婦の微妙な心理の陰影など感じられない。そのようなデリカシーを描くのは、作者には無理であったのだ。むしろ、子どもっぽい甘美な夫婦生活を夢想するに至った作者の、心情のリアリティ

こそ重要である。

続橋達雄「習作期の賢治文学」(注18)

続橋は、同論の中で「小説形式によって男女関係の問題を問おうとした作者は、荷が重すぎてその点では成功していない」とも言っている。「デリカシーを描くのは、作者には無理であった」という論に対しては、若干疑問を感じる。賢治は、「家族的係累」の「影」や「三年を経た夫婦の微妙な心理の陰影」という「デリカシーを描く」ことを目的に据えず、「子どもっぽい甘美な夫婦」を描くことを題材として選択した。それゆえ「嘉吉夫婦の、「ままごとのやうな」子どもっぽい甘えあい」が作品の大半を占めているのであって、決して「デリカシーを描く」ことが「無理」だったわけでも、「無理」だから「デリカシーを描く」ことを避けたわけでもないのではなからうか。

子供がいない理由に関しては、経済的な理由も考えられるが、賢治はその部分を描き出そうとしていない。手入れ前、おみちが学生に膳を用意したことを責める嘉吉の言葉を「この生活のながらから」「食えの申し訳げないの機嫌取りやがて」としていた。しかし、手入れによって「この生活のながら」を削除した。手入れに手入れを加え原稿と最後まで向かい合う賢治に良く見られる作業の一つだが、

これによって嘉吉夫婦の経済的な事情は暈かされた。おまけを加えるなら、学生に振る舞う膳も、手入れ前は「餅や海藻」のみだったが、手入れによって「さ、げを似た」ものが追加された。賢治が、祭日と言っても良い「盆の十六日」に、その土地での丹精込めた心のこもった食事を用意し、嘉吉おみち夫婦だけでなく、学生というある種の珍客にも振舞ったのだ、という形に変更を加えたのである。

「私は結婚するかもしれませんが——」^(註19)そう、森に語ったのは昭和六年七月。賢治が「東北砕石工場の技師となり、その製造を直接に指導し、出来た炭酸石灰を販売して歩いていた」頃、賢治「さいごの健康な年代であった」。理想を追い求め苦悩する日々の中から見出した現実の数々は、時に賢治の期待を大きく裏切り彼を苦しめた。しかし、必ずしも辛さばかりではなく、「禁欲は、けつきよく何にもなりませんでしたよ。その大きな反動がきて病気になったのです」^(註20)とこぼしながらも、その試みの末見出したものの中から、性を含んだ愛情の柔らかさや温かみを感じていたのもまた事実ではなからうか。

そういう経験を通り抜けた賢治が描いた「十六日」の夫婦は、子供のいない夫婦であった。その描かれ方に対する評価は先に紹介済みの先行研究に共通する部分がほとんどだが、少しだけ加えるなら、筆者はこの夫婦から夫婦とい

うよりは仲睦まじい兄妹の姿を感じてしまふ。それはもちろん、賢治とトシの姿を重ね合わせ近親相姦を感じ取るわけではなく、純粹に夫婦という一般的な括りや性差を超えた男女の姿を見ると言った方が良いかもしれない。^(註22)

結婚をすることと、親になることは全く別の問題である。結婚三年目の子供のいない夫婦は、家族という共同体の問題として見れば、(すでに始まっているかもしれないが)子供の問題をそろそろつかれ始めそうな時期である。一方、夫婦二人だけの問題として見れば、新婚初期の気恥ずかしさから生じる他人行儀なよそよそしさや緊張感が抜け、夫婦として家族としての安定感が定着してくる時期であろう。そして、その落ち着きの中で、いよいよ子供のいる未来を真剣に考えはじめ、そんな時期でもあろう。

父親母親の役割を背負わず描かれた夫婦は、それゆえ何処か艶っぽさを漂わせている。先に筆者は、子供がいないことを理由に、嘉吉おみち夫婦から真新しい夫婦のような空気を感ずると触れたが、加えて夫婦としての安定感もしつかりと感じ取ることが可能である。それまで詩や童話等に描いた女性像や聖母像ではなく、現実に生きる血のかよった女性あるいは夫婦を、父親として母親としての役目を背負う前の夫婦を、賢治は描いた。それは、必ずしも賢治が理想とした夫婦像が完全に投影され描かれたものでは

なかるうが、結婚三年目の夫婦としての関係が落ち着き始めた頃の、子供のいない夫婦を題材として扱ったことは確かである。

終わりに

詩ノート一〇六二〔墓地をすつきり square にしつ〕には、「十六日」を彷彿とさせるモチーフが散らばっているように感じる。この作品は手入れ後一〇五九「開墾地検査」として「春と修羅第三集」に収められ、のちに「開墾地」として「文語詩化を試み」たが「中断」^(注2)された作品である。どちらが先かを俄かに判断することは難しいが、「十六日」に通じるものを感じる。この詩以外にも、「十六日」に通じる書簡や作品がある。作品としては、たとえば、男女間の心の揺れを扱った賢治童話「土神ときつね」「蛙のゴム靴」「シグナルとシグナレス」や、子供のいる夫婦が登場する「氷と後光」、他の「短篇梗概等」^(注24)五篇がそれにあたる。

本稿は、「十六日」の新しい読みの可能性を探ることを目的とし、「十六日」に特化し考察してきたが、やはり証拠が不十分であり、他作品との比較検証が必要であること痛感させられた。今後先の作品等との比較考察が必要である。あるいは、なぜ「盆の十六日」なのかに注目し、

民俗学の視点から眺めれば、作品の別の表情が見えてくるかもしれない。これらについては、改めて論じる機会を得たい。

注

- 1 恩田逸夫「宮沢賢治『初期作品』攷」「四次元」昭和二年七月・「初期に描かれた女性像」「四次元」昭和三年四月・続橋達雄「習作期の賢治文学」「四次元」昭和四年一月
- 2 山本早苗「『十六日』考」「賢治研究」昭和四年二月
- 3 原子内貢「宮沢賢治の作品と江刺の地質 作品「十六日」と「泉ある家」のモチーフを求めて」「宮沢賢治研究 annual」平成二三年三月
- 4 前掲「宮沢賢治の作品と江刺の地質 作品「十六日」と「泉ある家」のモチーフを求めて」
- 5 『明治前期産業発達史資料別冊八七(三)』『明治前期産業発達史資料別冊八八(三)』(いずれも、藤原正人編、昭和四六年五月、明治文献資料刊行会)の「栗木鑛山」「赤金鑛山」参照。
- 6 前掲「初期に描かれた女性像」
- 7 小沢俊郎「土神と狐」の主題」「国語と国文学」昭和三年八月

- 8 伊藤眞一郎「宮沢賢治の小説的作品について」『近代文学試論』昭和五〇年十月
- 9 前掲「『十六日』考」
- 10 前掲「初期に描かれた女性像」
- 11 ラ・ロシユフコー『ラ・ロシユフコー箴言集』二宮フサ訳、平成元年十二月、岩波書店
- 12 「『十六日』の成立期は、前掲「『十六日』考」の山本説をはじめさまざまな説があるが、ここでは昭和三〇四年の体調不良期を抜け、快復の手ごたえを賢治自身が自覚した昭和五年以降の作と考えて行く。
- 13 たばこと塩の博物館編『日本のたばこデザイン』（昭和六〇年三月、たばこと塩の博物館）の値段表、および三和良一・鈴木俊夫『日本たばこ産業』（平成二二年九月、山愛書院）参照。
- 14 前掲『日本のたばこデザイン』の「たばこのパッケージのデザイン解説」参照。
- 15 明治三十二年に発売された森永ミルクキャラメルは、一時的に一二銭に値上げした時期もあったが昭和一五年まで一〇銭、グリコのキャラメルは発売当初から昭和二四年まで五銭であった。（週刊朝日編『値段史年表 明治・大正・昭和』昭和六三年六月、朝日新聞社）参照。
- 16 栗原敦「『加害』の影を——「山火」再読」『宮沢賢治 透明な軌道の上から』、平成四年八月、新宿書房
- 17 前掲「初期に描かれた女性像」
- 18 前掲「習作期の賢治文学」
- 19 森莊巳池『宮沢賢治の肖像』昭和五〇年二月、津軽書房
- 20 前掲『宮沢賢治の肖像』
- 21 伊藤（前掲『宮沢賢治の小説的作品について』）も、「嘉吉とおみちは、夫婦というよりも兄弟のような印象ではあるが、これは、賢治と妹トシ」という先入観のせいであらうか」と触れている。
- 22 「晩年には結婚してもよいと考えたことは確かなことであつた。その結婚の形態については、周囲の人人に、極めて軽く明るく語っている。その結婚は、きょうだいの愛のような愛を土台にするだろう——と」という、森の貴重な記録がある。（前掲『宮沢賢治の肖像』）
- 23 ちくま文庫版『宮沢賢治全集』第二巻（昭和六一年四月、筑摩書房）の入沢康夫解説「本文について」参照。
- 24 手入れ前、学生は「大学のもんですがね。」と伝えるのみだったが、手入れ後は、「仙台の」を加え仙台の大学に通う学生という設定にしている。これによって、読者は高等教育を受けた知識人としての作者賢治と学生を重ね合わせるかもしれないが、一方でこの手入れは、作者が学生と自身の重なりに隔たりを持たせるともとれ

る。つまり、単なる「学生」ではなく「仙台の学生」と設定にすることによって、作者と似ているが完全に合致はしない客観性を帯びた存在となる。「十六日」と同じモチーフが扱われているとされる「短篇梗概等」に「泉ある家」がある。この作品ではより一層賢治との重ね合わせを意識してか、「盛岡」の学生という設定になっている。また主人公の名前も宮沢を振ったような仕上がり。「富沢」となっている。この件に関しても改めて論じる機会を得たい。

*
宮沢賢治作品の引用は、すべて『新校本宮沢賢治全集』
全十六巻（筑摩書房）に拠る。

（たじま あやか・実践女子大学大学院博士課程）